

〈本論第一回：キーワードと年表〉

1. 年表

①ルネサンス的個我と文化共同体

- 1449 ロレンツォ・デ・メディチ誕生（～1492）
- 1452 レオナルド・ダ・ヴィンチ誕生（～1519）
- 1469 ロレンツォ（イル・マニフィコ）の成人を祝して馬上槍試合が開催される  
（→ボッティチェリ、ワールブルク）、同年、ロレンツォはフィレンツェの  
実権を握る
- 1475 ミケランジェロ・ブオナロティ誕生（～1564）
- 1483 ラファエロ・サンティ誕生（～1520）
- 1569：トスカーナ大公国の成立（～1860）＝ルネサンス的都市国家の終焉

②デカルト的合理主義

- 1596 ルネ・デカルト誕生（～1650）
- 1618～1648 三十年戦争
- 1619 デカルトの夢
- 1637 『方法叙説』

③ホッブズの集権国家モデル

- 1588 トマス・ホッブズ誕生（～1679）
- 1618～1648 三十年戦争
- 1651 『リヴァイアサン』
- 1640～1660 清教徒革命
- 1640 ホッブズのパリ亡命
- 1645 ホッブズ、王太子（後のチャールズ二世）の数学教師に
- 1649 チャールズ一世処刑
- 1660 チャールズ二世王政復古

④カントの立法精神

- 1724 イマヌエル・カント誕生（～1804）
- 1775～1783 アメリカ独立戦争
- 1776 アメリカ独立宣言
- 1784 『啓蒙とは何か』
- 1787 『純粹理性批判』
- 1788 『実践理性批判』
- 1789 フランス革命
- 1790 『判断力批判』

## 2. 本論考のテーマと方法

- 日本近現代を一つの定位連続体として再構築する
- その基軸を憲政史に置く（二つの憲法の乖離と連続）
- 方法は定位学（哲学的定位学）を用いる（われわれはいまどこにいるのか）
- イデオロギー分析、エートス分析、文体分析の総合

## 3. 序論で明らかになった日本近代の基本問題

- 〈錦旗〉と〈官軍〉（西郷隆盛、乾退助）による近代国家の出発
- 立憲意識と国体論の同時的発生
- 立憲は当初から近代化の必然として把握されていた（木戸孝允他）
- 国体論の神権的超越論は、家産国家型の専制志向を内在させていた
- それは近代憲法の法治理念と正面から衝突する
- これは憲政史では美濃部達吉の〈天皇機関説〉と穂積八束の政体国体分離論の対立として顕在化した
- 日本近代の基本的問題は〈速度〉と〈外発性〉として総括できる
- したがって主体的課題は〈内発化〉である（漱石の〈個人主義〉）
- 近代化の歪みは、〈農村問題〉（小作問題、小作争議）へと収斂した
- それは憲政的に解決可能であったが、軍国化がそれを遅滞させた

## 4. 日本近代を理解するためには、その前提としての日本近世（江戸幕藩体制）を正しく理解する必要がある

- 定位範疇に絞り込んだ概観がもっとも効率的である

## 5. 近代化の前提としての前近代的（江戸的＝近世的）定位

- 心学、儒学、国学、蘭学の四範疇の並列 = 多元性

## 6. 近現代の定位探索、再構成を日本のみに限定していいのか

- もちろん近現代はつねに世界状況との連結、共振が生じている
- その根源には人類史の画期としての第二革命＝機械情報革命がある

- 日本のアングルから「海外の状況」との連関を探ろうとする試みは比較文化史、外交史等ですでに試みられてきた
- しかしその知見は断片的であり、日本の近現代を一つの定位連続体としてとらえようとするわれわれの立場からは、残念ながら重要な参照対象とはならない
- その原因はおそらく全体像の欠如にある
- 近代とは、全体として、どういう定位の時代なのか
- 近代化の普遍モデルの探索
- 日本的類型（途中で阻害された）のもつ意味

7. ヨーロッパと日本の二度の遭遇 → 開化の内発性・外発性の尺度で測ること
- ①戦国末期～江戸初期まで → 鉄砲、宣教師、国際貿易
    - = 「種子島」渡来（1543）～島原の乱（1637～38）
      - 内発的開化の程度に大きな差はない → 受容習得の速さ
      - ヨーロッパは近世的集権に向かう過程にあった
      - 日本も萌芽的に絶対主義的集権への運動が見られた（信長、秀吉）
  - ②幕末開港開国 → 黒船来航から（1853～）
    - 開化の外発性（漱石）、近代化の速度（ノーマン）

8. ヨーロッパを直接の淵源とする近代化が世界の近代化の実体となった
- 類型性の隠蔽
  - 普遍的近代 = ヨーロッパ的近代との等値
  - 模倣的欧化主義の問題
  - 反発としての〈近代の超克論〉（1942）
  - 内実是对米英戦争の翼賛だが、その背景には普遍的近代モデルの難しさ
  - 非・ヨーロッパ的近代にとっての近代からの疎外
  - 近代否定論の系譜は国体論の台頭と連動している（『かのように』の五條子爵の例）

9. ヨーロッパ的近代のマクロの特性
- 内的には個我の充実と自由市民の成熟
  - 外的には宣教的、軍事的強権体系（→ペリーたちの〈軍艦外交〉の背景）
  - 非・ヨーロッパ圏における、伝統主義の勃興 → 伝統主義における非・近代的復古の問題（→〈錦旗〉および国体論の問題へ）

10. 現状の問題 → 近代的遺産全般の金属疲労
- 民主主義、議会制、法治、基本的人権等の近代的価値観の疲弊
  - 根本の問題は、普遍的近代のモデルそのものが確立されていないからではないか

- 1 1. 特異に地域的な病理を普遍モデルから切り離すこと
  - 固有にヨーロッパ的な近代の病理的解析
  - 奴隷制、人種論、植民地主義の問題
  - 普遍的近代にも問題性は付随する
  - しかしそれは普遍的問題であり、固有にエスニックな病理ではない
  - 奴隷制、人種論、植民地主義は、十九世紀的な〈文明化〉イデオロギーに収斂する
  - おそらくこれが地域固有の病理現象であるという直感を持つこと
  - 非・ヨーロッパ圏にも、もちろん固有の病理現象が付随する
  - 国体論の闇から派生する〈日帝〉のイデオロギーはその一つである
  
- 1 2. 普遍的近代モデルの造型
  - 正のヨーロッパ的な近代の定位遺産を、非・地域化＝普遍化すること
  - 基底的事実としての機械情報革命 → 真の包括性、普遍性
  - 人類史の第三段階への過渡期としての近現代
  - メガ・道具系の自己展開と、種としての人類の関係の本質を考え続けること
  - 定位哲学の基本課題 → 新たな人文性の構築 → 人類史の最終段階（第三段階）の先駆けとなること → その一環としての近代的定位の普遍性の模索
  - その延長としての日本近現代の連続性の探索（本論考の課題）
  
- 1 3. 普遍モデル構築にとっての基本問題
  - 類型性の欠如
  - ヨーロッパ近代の型が、特に植民地主義によって抑圧的に世界に伝播したことが、他の近代を解体してしまった
  - 植民地から独立した非・ヨーロッパ圏の国家
  - 近代に対する根本的なアンビバレンツ
  - 日本のみが例外 → 非・ヨーロッパ圏で唯一自律的な近代を体験した
  - 日本近代は、第三世界から出発し、体制の自己崩壊により、第三世界に転落した、そして再度そこから G7 に名を連ねている。この全体の意義を考えること
  - 日本のハイブリッドな位置をヨーロッパ近代の運動と連結させてみる
  - 類型性の再構築が可能かもしれない
  - それを通じて、普遍的近代への視界が啓けるかもしれない（本論考の実験的意義）
  
- 1 4. 価値体系の普遍性モデル → 第一革命の帰結としての世界宗教
  - 古代的集権の〈文明〉病理 → 超越的〈法〉の必要性

- すべての世界宗教に内在する超越法の観念を、普遍的価値体系の基底として捉え直すこと
  - そこにおいて、周縁集団は、普遍的価値の他者性を自己の価値として認知し、受容を完了する
  - 全体的淵源としての〈優越集団〉の不在
  - ユダヤ教の限界を破った原始キリスト教の意味
  - 同じ普遍化の現象は仏教、イスラムにおいても観察される
  - 第二革命と超越的価値体系の必然的連鎖への直感へ
15. 近代的〈文明〉病理 → 超集権の病理として外化 → 法治の必然性
- 近代的法治の根源に〈自然法〉が置かれたことの普遍的意義
  - それは国家学からは過渡的法源として位置づけられる（イエリネク等）
  - しかし〈文明〉との関係においては、依然として超越的であり、価値的である
  - 文明的自己疎外からの回復は、人間に本来備わった定位行為の発現である
  - 法治は近代文明的疎外からの自己回復の最大要因である
16. 中心と周縁
- 中央から周縁への価値の伝播 → 周縁から中央の価値体系への参加
  - 価値の自己性確立（拡大）の本来的モデル
  - ローマ帝国における〈五賢帝〉は、周縁の出身者であった
  - 維新幕末の〈志士〉は、周縁雄藩の出身だった（勝海舟の〈人材ノート〉）
17. 近代においても、中心と周縁には興味深い弁証法が見られる
- 中心から周縁への離脱 → 〈ヨーロッパ疲れ〉の人々の系譜
  - ニーチェ、レヴィ＝ストロース他
  - 周縁から中心（あるべき中心）への参加
  - 主体はつねに普遍をめざす（定位哲学の前提）
18. 理論的な類型性を再構築すること
- 失われた近代文明の多型性、多様性を前提として、類型性の経験モデルを堅持することが必要である
  - 不完全な、しかし自立的近代を体験したわれわれに固有の課題、可能性
  - 軍艦外交と植民地化を伴わない近代が、本来の近代である
19. 近代モデル構築の原理 → 淵源と根源の弁別
- 地域的多様性 → 固有の史的淵源の展開による独自性
  - 根源の普遍性 → 構造的普遍性 → 類型性からの抽象化が可能
  - 河の淵源は河の源流域としてモデル化できる
  - 河の根源は山、森、降雨と保水の普遍構造的性としてモデル化できる

- すべての河は、淵源と根源を持つ → 淵源は具体的、根源は理念的
- すべてのマクロ時代区分は、その淵源と根源をもつ
- その時代におけるすべての集団は、淵源と根源をもつ
- 時代定位の普遍性は、根源の理念的普遍性として再構築が可能である
- 近代的定位の普遍性は、ヨーロッパ的近代の寡占によって、類型性を阻害されている
- それが根源モデル構築の困難の前提となってきた
- しかし不完全であるものの、日本近代の中にこそ、その淵源と根源の二重性の事実が確認できる
- それが新たな類型モデルとその類型に基づいた根源的定位の理念モデルの再構築を可能とする

## 20. 近代的定位の根源モデル再構築の方法的手順

- ヨーロッパ近代からの淵源モデルの抽出
- 日本における淵源モデルの確認（前近代的定位の多元性の確認）
- 類型的比較参照による根源モデルの造型

## 21. ヨーロッパ的近代の淵源モデル

- 個と集団の定位モデルへの分岐
- 両者は弁証法的浸潤関係にあるが、特異な偏差を示す
- 個我の定位型はヨーロッパ的淵源でありながら、限りなく根源に近い
- それを実証するのは、日本的定位との比較においてである（特に蘭学）
- 対して集団的定位は当初から強い自同性への偏執を示す
- これが人種論、奴隷制、植民地主義の展開を生む（十九世紀的病理）
- この章ではまず個我の次元での定位モデル構築を行う

## 22. ヨーロッパ近代における個の定位モデル

- ① アトム的個我の覚醒 → 世界と人間の発見（ルネサンス）
- ② 個我の合理主義 → 世界の合理的操作の可能性（デカルト）
- ③ 個我相互の契約関係 → 自動機械としての強権国家の構築（ホッブズ）
- ④ 個我の内的立法 → 強権の法治へ（カント）

## 23. 近代的個我の自己定位

- 基底的现象はアトム化
- 人類史の第二革命としての機械情報革命の本質によって規定されている
- 巨大化する道具系は、操作主体である人間の等質化を前提とする
- アトム的個我の出現の必然性
- 個我が所属した旧来の共同体は、このアトム化によって崩壊する  
= 中世的因襲からの近代的個の自立

→ この基底現象から、自己組織的に後発するモメントが付加されていく

#### 2 4. 近代的定位の第二の基底現象

- 第二の基底現象は近代的強権の発生である。
- これは個我の合理主義と機械情報系をつらぬく〈中心〉への志向性（中心からの操作、中心からの効率的組織化）の二面からの力学によって規定されている
- 自動機械として個我が構築する強権（リヴァイアサン）のモデルへ収斂
- 立法的自律（自己拘束）の必然性
- 個我による先取り（カント的自律）
- 法治国家の理念への自己展開（グナイスト、イエリネク）
- 明治的立憲の系譜的前提

#### 2 5. 江戸的定位の多元性 → 日本における近代的定位の淵源

- その淵源に内在する近代的根源性
  - ① 個我のアトム化 → マニファクチュア的生産の現実
    - 貨幣経済の進展による生活の個別化、アトム化
    - 都市化の進行によるアトム化
    - 共同性の弛緩、「旅宿の境涯」（荻生徂徠）  
（となりはなにををするひとぞ 等）
    - ⇔ 人為的身分制度（士農工商）による階層化
    - これはアトム化ではなく、イデオロギー的固定
  - ② 合理的集権国家の胎動 → 農本の枠の中での重商主義の登場
    - 天保期の雄藩における改革の成功へ

#### 2 6. 江戸的多元性 → 近代化の貢献度は各定位類型で異なる

- 心学は基底的、民衆的
- 儒学、国学は復古的（古学）
- 蘭学は自己塑性によって全体性を回復した

#### 2 7. 近代的定位の全体性

- 合理主義的定位の自己塑性（個我の定位において特に強い）
- 蘭学には、この自己組織的展開性をもっとも強い
- 水中花的自己展開力
- 儒学、国学にはこの全体性、自己塑性が欠如（復古に終始）
- 蘭学はこの自己塑性によって、近代的合理主義の本質を自己展開することができた（杉田玄白、福沢諭吉など）
- 近代化の決定要因に

#### 2 8. ヨーロッパと日本の近代的定位の比較参照

- 基本的二律背反 → 個我の覚醒と集権化の進行
- この基本構造において、両者は比較可能であり、その比較から類型性が浮かび上がることが期待できる
- 根源としての近代的定位モデルの構築へ
- われわれは周縁の淵源を辿りつつ、中央の根源へと参加する

(本論第一回:キーワード終わり)